

私の一冊

社会福祉学科 三田英二 先生

ジョン・シャリー著 袴田俊一、三田英二監訳
『解決志向グループワーク:臨床心理学の応用とその展開』

小鹿図書館 : 146.8/Sh 13 (晃洋書房)

自分が翻訳した本を取り上げたのは、宣伝のためと思われても仕方がないが・・・

この本を翻訳し、これまでの臨床心理学のアプローチ方法が全て出そろったな、と感じた。

私が学生の時は、臨床心理学は、「心理検査」と「心理治療」の2本柱で構成されていると学んだ。その後、コミュニティ心理学が登場し、「臨床心理学的地域援助」と呼ばれる分野も臨床心理学の分野となり、臨床心理学は3本柱で構成されるようになってきた。

2本柱の時代の主な心理学的な援助技術(心理療法)は、「精神分析的カウンセリング」と「クライアント中心療法」、そして「行動療法」であった。これら技法は、相談室の中で行うものとされ、心理職たるもの、「外」でこれら技法を「使ってはならぬ」といわれた。

コミュニティ心理学は、「環境」、すなわち「外」を重視する。心理職は、このコミュニティ心理学が登場するまで相談室の中で、いわば「守備固め」に徹することが求められていた。コミュニティ心理学の登場により、「地域援助」も業務の範囲、家庭訪問・職場訪問は当たり前、「外」での活動も重視され、いってみれば「打って走れて守れる」走攻守そろった心理職が求められるようになった。

問題とする時制も、特に精神分析的なアプローチは、「トラウマ」が重要な概念になるため、過去の出来事に重点が置かれる。コミュニティ心理学で開発された危機介入法は、「今ここで」起きていること、つまり現在に重点が置かれる。

解決志向アプローチは、原因は追及せず、望む未来(目標)を描き出し、目標を達成することで、現在抱えている困難な状況が改善される、と考えているところにその特徴がある。つまり、時制は未来に置いているのだ。解決志向アプローチが登場したことで、心理学的な援助技術で扱う時制が全て出そろったことになることは、「解決志向アプローチ」の後書きにも書いたことである。

これ以外の解決志向アプローチの特徴として、「敬意あふれる好奇心を持つ」という点がある。精神分析的なアプローチは、技法の難しさもあり、「専門家中心主義」といわれる。コミュニ

ティ心理学では、「地域中心主義」を掲げ、非専門家・反専門家の活用を提唱し、専門家は、コンサルテーションなどを活用し、「黒子役」に徹すべきだと主張した。コミュニティ心理学が登場した頃、コミュニティ心理学だけの影響ではないと思うが、その時代感覚がそうさせたのだと思うが、福祉施設利用者と施設職員は対等の関係だ、と考えられるようになり、それまで、施設利用児者を「入所児」・「入所者」と呼んでいたところ、福祉施設では、「入所者」が住民票を施設住所に登録していたこともあり、「住民」と呼んでいた施設があった。解決志向の「敬意あふれる好奇心を持つ」という言葉は、対等な関係を更に進めたような印象がある。専門家中心主義では、専門職者が利用者をリードする役割を担っている。それは、カウンセリング場面などで、カウンセラー（専門職者）が興味・関心を持ったことに話題の焦点が当てられるからである。「興味あふれる好奇心を持つ」という専門職者の態度は、クライアント自身のことは専門職者ではなく、クライアント自身がかもっとも良く理解していると考えるためである。ただ、クライアントは、自分自身では解決できそうもない困難な状況の中で、不安や緊張に苛まれ、クライアント自身が持っている様々な資質や能力に気付けないでいる。専門職者は、気付けないでいるクライアントが持っている資質や能力を気づいてもらえるように導いていくことが、その役割であると解決志向では、強調する。

解決志向アプローチは、成長促進モデルである。しかし、我々は、自然科学的な思考方法（修理モデル、直線的因果律）—原因を明らかにし、その改善に努める—になれている。しかし、人間関係のトラブルや心理的なダメージは、原因を特定していくことが難しい。更にしかし、なれた思考方法のため、原因が明確に特定できなくとも、何かを「原因」と考え、それを思い込むことによって、何となく落ち着いていく。それが間違っている方法とは思っていない。ただ、もし原因が見つからず、状況が改善できないのであれば、時制を「現在」に置き、今ここで困っていることの改善に努めるという方法がある。それでも、状況が改善できないのであれば、時制を未来に置き、目標を立て、望む未来像に向かって努力する。解決志向アプローチが考案されたことで、上述のような、原因（過去）を探っても見つからなければ、今（現在）問題となっていることの解決に努める、それでも状況に変化がなければ、目標（未来）を立て、その目標を達成することに努める、といった「過去」・「現在」・「未来」と順を追った援助方法が、解決志向アプローチの登場により可能になったと考えている。